

椋木哲夫詩集『そっと ひとひら』（私家版）

風刺 ユーモア 自己探求 半世紀の軌跡

洲 浜 昌 三

「石見詩人目次録」によると、椋木さんが同人になられたのは「石見詩人」三十五号（昭和四十三年）からです。ぼくと岩石さんが、同じ職場の大先輩・田原敏郎、矢富巖夫両先生に誘われて同人になったのは、その一年前、新卒三年目の青臭い若造でした。

ぼくの記憶では、椋木さんとお会いしたのは四十数年前の同人合評会の時だけです。直接話したことはないで、ある意味では未知に近い人です。

しかし、長い間、その詩を読んでいるので、詩を通して作者の心的な佇まい、軌跡がよく理解できます。

現実を見る的確な目、現実に対する前向きな姿勢、受け止めて深く思考し、それを具体的な分かりやすい言葉で表現。詩のテーマも明確で、彫りも深く、すっきりしていて、印象に残ります。

この詩集には、昭和四十四年から現在まで、年代順に三十六篇が掲載されています。初期の詩は、やや抽象的で漠然としたところがありますが、平成十年以降の作品には、書く意図が明確で、それぞれ個性と重み

があり、読む楽しさもあります。鋭い批判や、ユーモアのある詩、人生を考えさせられ詩もあります。

「誤聴聞」はユーモアや皮肉、真実や実感もある傑作で笑わずにはおれません。意味不明のお経を聞いて眠気がさし「誤聴システム」が起動したのです。

「まかかこーひーか／こりやまだぬーるい／ふんだーり けったーり／おおぶそー」（二部のみ）「膨らみ」

「つぶやき」「新種ウイルス」「やっぱり気にかかる」「テレビシヨップ」「独り言」等々は、直球で明快、

鋭い批判、ユーモアに溢れ、同時に重みや深みもあり、この詩人の面目躍如たる世界だといえるだろう。

外向的であると同時に内向思考も強いのは、この詩人の特徴といえるだろう。「拝啓 神様」では、神様に手紙を書き最後に問います。「拝啓 神様／はて心の主は／あなた?!／わたし?!・・・」人間とは？心とは？神へ手紙を出すという面白い発想で、自己の存在を知ろうとします。「幸せ」「今」「予感」等々は、自己探求し、生き方を自問して生まれた詩です。

「もう そう焦らず 遊んでいるような／空行く雲を 眺めているのもいい」「正直になれることだけを大切にしたいものだ」（「予感」の一部）これは「予感」を目前にした現在の心境なのでししよう。